

【朝倉地区人権啓発情報センターだより】 2024(令和6)年4月12日(金)

みんなの“人権”が尊重される
『まちづくり』への《懸け橋》

No. 63

発行：
人権啓発指導員
【大楠 茂美】



この絵本は、韓国・中国・日本の絵本作家
らが意見を交わし合い、子どもたちに贈る
『平和絵本シリーズ』として作られました。

4人の日本人絵本作家が、中国と韓国の絵本
作家らに手紙を書いたことがきっかけだったそう
です。…試作本を持ち寄り、「本音で語り合える
ようになったからこそ、分かったことが、たくさん
あります」と、浜田桂子さんは書かれていました。

その一つは、本当に戦争を拒否するためには、
「加害者意識をもつことが必要だ!!」と思うようになったこと…だったそうです。

私は最初に、「へいわって せんそうする ひこうきが とんでこないこと」「そら
から ばくだんが ふってこないこと」と書き、挿絵に大きな爆弾の広がる様子を
描きましたが、「戦争を、被害を受ける、と捉えているのでは?」との意見が…。

この被害意識は、戦争の実相(ありのままの姿)を知る上で大事だけど、
「被害に、立ち向かわなければ!!」と反転する可能性だってあります。ひとたび
戦争になれば、人間のもっている善なるもの、美しいものは押し殺され、人間性が
ゆがめられていく。…加害を意識するということは、「こうした状況下になると、
個人の資質に関らず(人間は)変わってしまう…」ということを学ぶということ。

その学びが、戦争そのものを拒否する力になると、気づかされたそうです。

『へいわって どんなんこと?』 浜田桂子

せんそうを しない
ばくだんなんか おとさない
いえやまちを はかいしない

だって だいすきな ひとに
いつも そばに いてほしいから
おなかすいたら
だれにでも ごはんが たべられる
ともだちと いっしょに
べんきょうだって できる

それからね へいわって こんなこと

みんなの まえで
だいすきな うたが うたえる

いやなことは いやだって
ひとりでも いけんが いえる

わるいことを してしまったときは
ごめんなさいって あやまる

どんな かみさまを しんじても
かみさまを しんじなくても
だれかに おこられたりしない

おもいっきり あそべる
あさまで ぐっすり ねむれる

いのちは ひとりに ひとつ
たった ひとつの
おもたい いのち

だから ぜったいに
ころしたら いけない
ころされたら いけない
ぶきなんか いらない

さあ みんなで
おまつりの じゅんびだよ
たのしみにしていた ひが
やってきた
パレードの しゅっぱ〜つ!!

へいわって
ぼくが うまれて
よかったって
いうこと



きみが
うまれて
よかったって
いうこと



そしてね、
きみと
ぼくは
ともだちに
なれるって
いうこと

いのち は 一人に一つ たった一つの おもたいいのち、

この絵本に込められた「想いや願い」を、世界中のみんなで共有し合い、日々の行動につなげていく地道な積み重ねが、一人一人の人権【=幸せに生きる権利】を尊重することではないでしょうか。「ガザ地区」「ウクライナ」…、今まさに…!!

今年度、人権の花(ひまわり)栽培にご協力
いただく各小学校、保育所(園)・幼稚園さん
を紹介します。どうぞ、よろしくお願いします!!



■ 『ニコニコひろがる! ひまわりのはな運動』(保・幼)

【東峰村】・小石原保育園
【筑前町】・美和みどり保育所 ・みなみ幼稚園
【朝倉市】・安川保育所 ・三奈木保育所 ・久喜宮保育所 … **6 か所**



■ 『人権の花(=ひまわり)運動』(小学校)

【筑前町】・東小田小(3年) ・三輪小《学校独自》
【朝倉市】・甘木小(4年) ・福田小(3年)
・大福小(3年) … **4校(+1校)**



熱中症等にはくれぐれもご留意され、ひまわり栽培を通じ、
かけがえのない生命との出会いや、仲間と協力する大切さ
など、豊かな人権感覚を育むきっかけにいただければ…!!

【朝倉地区人権啓発情報センターだより】 2024(令和6)年 6月25日(火)

みんなの“人権”が尊重される
『まちづくり』への《懸け橋》

No. 64

発行：
人権啓発指導員
【大楠 茂美】

沖縄県は6月23日、太平洋戦争末期の沖縄戦の犠牲者を悼む
「慰霊の日」を迎えました。…《2024[R6].6.24(月):西日本新聞朝刊より》



24万2225人の名前が刻まれた「平和の礎」の前で、
23日、朝早くから静かに手を合わせ、平和の祈りを…!!

県民の4人に1人の命が奪われた
沖縄戦。…23日、最後の激戦地と
なった糸満市摩文仁(まぶに)の
平和記念公園で、戦没者追悼式が
行われ、平和の詩:「これから」が
朗読されました。

託された「平和のバトン」の詩、
その想いや心底の叫び、未来への
希望が、全世界の人たちに届くこ
とを、心から願っています!!…

「これから」

沖縄県立宮古高校3年 仲間友佑さん

短い命を知ってか知らずか 蝉(せみ)が懸命に鳴いている
冬を知らない叫びの中で 僕はまた天を仰いだ

あの日から七十九年の月日が 流れたという
今年十八になった僕の 祖父母も戦後生まれだ
それだけの時が 流れたというのに

あの日 短い命を知るはずもなく
少年少女たちは 誰かが始めた争いで
大きな未来とともに散って逝った

大切な人は突然 誰かが始めた争いで
夏の初めにいなくなった 泣く我が子を殺すしかなかった
一家で死ぬしかなかった 誰かが始めた争いで
常緑の島は色をなくした 誰のための誰の戦争なのだろう
会いたい、帰りたい 話したい、笑いたい
そういくら繰り返そうと 誰かが始めた争いが そのすべてを奪い去る

心に落ちた 暗い暗い闇はあの戦争の副作用だ
微(かす)かな光さえも届かぬような 絶望すらもないような



怒(いか)りも嘆(なげ)きも失(な)くしてしまいそうな 深い深い奥底で
懸命に生きてくれた人々が 今日を創(つく)った 今日を繋(つな)ぎ留めた
両親の命も 僕の命も 友の命も 大切な君の命も すべて

心に落ちた あの戦争の副作用は 人々の口を固く閉ざした
まるで 戦争が悪いことだと 言っではいけないのだと
口止めするように 思い出したくもないほどの あの惨劇がそうさせた

僕は再び天を仰(あお)いだ 抜けるような青空を 飛行機が横切る
僕にとってあれば 恐(おそ)れおののくものではない
僕らは雨のように打ちつける 爆弾の怖さも
戦争の「せ」の字も知らない けれど、常緑の平和を知っている
あの日も 海は青く 同じように太陽が照りつけていた
そういう普遍の中にただ 平和が欠けることの怖さを
僕たちは知っている

人は過ちを繰り返すから 時は無情にも流れていくから
今日まで人々は 恒久の平和を祈り続けた
小さな島で起きた あまりに大きすぎる悲しみを
手を繋(つな)ぐように 受け継(つ)いできた



それでも世界はまだ繰り返してる
七十九年の祈りでさえも まだ足りないというのなら
それでも変わらないというのなら
もっともっとこれからも
僕らが祈りを繋(つな)ぎ続けよう
限りない平和のために 僕ら自身のために
紡(つむ)ぐ平和が いつか世界のためになる そう信じて

今年もこの六月二十三日を 平和のために生きている
その素晴(すば)らしさを噛(か)みしめながら



今年も、人権の花(ひまわり)が一斉に芽を出し、庁舎周りの花壇に、`笑顔`が広がっていきます…

「雑草という草はない。どの草花にも、必ず、その一つ一つに名前があり、そこで生きる理由がある。この世に咲く意味がある。」…という牧野富太郎(植物学者)さんの言葉が思い出されます。`平和・環境・人権…`は、かけがえのない生命(いのち)を育む`生命線(せいめいせん)`です!!

【朝倉地区人権啓発情報センターだより】 2024(令和6)年 7月 9日(火)

みんなの“人権”が尊重される
『まちづくり』への《懸け橋》

No. 65

発行：
人権啓発指導員
【大楠 茂美】

7月は同和問題啓発強調月間事業の一環で、**人権パネル展**を行っています。
～みんなの人権が尊重される社会を、みんなで築いていきましょう!!～



朝倉地域生涯学習センター（1F ロビーにて）
【人権パネル展、展示期間：7/1（月）～7/31（水）】

福岡県では同和問題の解決をめざして、1981（昭和56）年度から毎年7月を「同和問題啓発強調月間」と定め、様々な啓発行事を通して、差別をなくす取組を行なっています。（今年で43回目）
その一環として、朝倉地区人権啓発情報センターでは、同和問題をはじめ、様々な人権問題の解決に向けた『人権パネル展』を実施中です。**ご覧いただければ…!!**



私たちの身の回りには、部落差別（同和問題）をはじめ女性、こども、障がいのある人、高齢者、外国人、性的少数者、HIV感染者、ハンセン病患者・元患者とその家族、拉致被害者などの問題…さらに、ますます深刻化するインターネット上での人権侵害など、様々な人権問題が今も解消されずに残っています。

人権問題は、誰かのことではなく、自分のこととして受けとめて、家庭や職場、地域など、日々の暮らしの中で、まずは周りの皆さんと話し合ってみることが、解決に向けた確かな一歩、につながっていくと考えます。

今回は、部落差別（同和問題）の正しい理解と解決に向けたパネルに加えて、福岡県人権啓発情報センターよりお借りしたパネルの中から、『女性の人権』『外国人の人権』『刑を終えて出所した人の人権』も一緒に掲示しております。…差別解消に向けた未来を拓く、確かな学びのきっかけになることを願って…!!



朝倉地域生涯学習センターの花壇では、人権の花（＝ひまわり）が少しずつ育っています!!

今回、掲示しているパネルから、『人の値うち』という詩をご紹介します。…

「人の値うち」 江口いと

(「荊を越えて」より)

何時かもんぺをはいて
バスに乗ったら
隣座席の人は私を
おばはんと呼んだ

戦時中よくはいたこの活動的なものを
どうやらこの人は年寄りの
着物と思っているらしい

よそ行きの着物に羽織はおりを着て
汽車に乗ったら
人は私を奥さんと呼んだ
どうやら人の値うちは
着物で決まるらしい

講演がある
何々大学の先生だと言え
内容が悪くとも

人々は耳をすませて聴き
良かったと言う
どうやら人の値うちは
肩書で決まるらしい

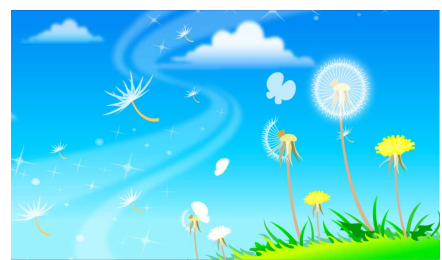
名も無い人の講演には
人々はそわそわして帰りを急ぐ
どうやら人の値うちは
学歴で決まるらしい

立派な家の娘さんが
部落にお嫁に来る
でも生まれた子供はやっぱり
部落の子だと言われる
どうやら人の値うちは
生まれた所によって決まるらしい

人々はいつの日
このあやまちに気付くであろうか

この詩は、作者の江口いとさんご自身の体験をもとに書かれたものです。いとさんは1912(大正元)年、愛媛県で生まれ育ち、二児の母親となってすぐに夫を戦争で亡くし、そののち苦労しながら子どもさんを育ててこられました。…

同和地区出身という理由で、ご自身や息子さん、お孫さんの三代にわたって差別された江口いとさんは、生活の中から、自然にあふれる想いや部落差別に対する怒りを、詩や短歌に表しました。2009(平成21)年に旅立たれるまで、生涯をかけて差別解消に向け、全国各地で3000回以上もの講演を通して、同和問題の解決を訴え続けてこられました。…



タンポポの「わた毛」のように…!!

表面的な「見た目」や「肩書」で決めつけてしまったり、「げなげな(うわさ)話」等に心を奪われてしまったりすることは、人として幸せに生きる権利【=人権】を、著(いちじる)しく侵害してしまうことにつながっていくのではないのでしょうか。…

江口いとさんが、一生涯、伝えられてきた部落差別(同和問題)の不合理さ、誰もがみんな、一人一人のかけがえのない生命(いのち)を生きている!!…という想いから、日々の暮らしを振り返り、身近な出来事を通して、部落差別をはじめ様々な人権問題を、自分のこととして考える機会にしていただければ幸いです。

【朝倉地区人権啓発情報センターだより】 2024(令和6)年9月25日(水)

みんなの“人権”が尊重される
『まちづくり』への《懸け橋》

No. 66

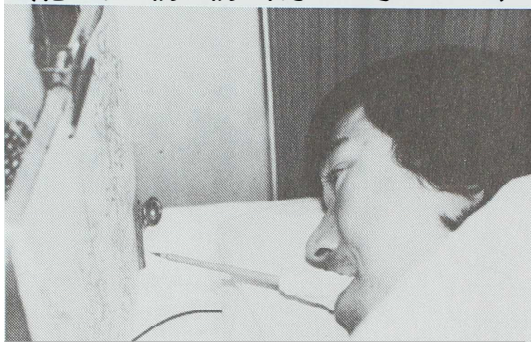
発行：
人権啓発指導員
【大楠 茂美】

今年4月28日、78歳でご逝去された詩画家：星野富弘さんの「風の旅」「鈴の鳴る道」「足で歩いた頃のこと」…を再度、読み返してみました。

今から43年前のこと…。2年間の会社勤めから、中学校の非常勤講師として再出発した1981(昭56)年度の終わりに、「風の旅」が出版され、ページをめくるたびに、自分のことと重ねながら、ハッ…!とさせられたことが、今でも鮮明に思い出されます。

星野さんは大学卒業後、体育教師として中学に赴任。2か月後、クラブ活動の指導中に、首から下の自由を失う突然の事故に…。その後、草花を描き、詩を添えることが、生きる希望に…!!

(花びら一枚一枚に、思いを込めて…!!)



■「かぎりなくやさしい花々」PI04参照のこと

『…寝たきりの入院生活を送る星野さんに、同級生や山仲間から手紙が数多く届いた。「短くてもいい、お礼の手紙をかけたら…」と、上向きのままサインペンを口にくわえたけど、頭を浮かすことができず、一本の線すら描けない。その様子を見た看護実習生が「横向きの姿勢で書いたらどう?」と声をかけた。顔の前にスケッチブックを立ててもらい、ガーゼにくるんだペンをくわえ頭をずらすと、ペン先が動いた。口で書く初めての字、大きく「ア」と書いた。よだれがガーゼから染み出しても、書くのを止められなかった。母親に、スケッチブックを持ってもらい、一文字、一文字の「字」を、精いっぱい書いた。…

その頃、自分の話を聞き、毎週(土)見舞いに来てくれる女性がいた。彼女がある日、病院に来る途中で摘んだ、ハルジオンの花を持ってきてくれた。普段は畑の天敵と言われる雑草だが、眺めていると、その美しさに引き込まれた。…

いつの間にか、お礼のはがきには、絵が描かれるようになっていた。一輪一輪に向き合ううちに、生きる力の奥深さに気付く。「花に描かせてもらおう!!」そのままの美しさを切り取り続けた。絵を描き始めて6年経った後、展覧会「花の詩画展」を開いた。



神様が たった一度だけ
この腕を 動かして下さるとしたら
母の肩を たたかせてもらおう



風に揺れる
ぺんぺん草の実を見ていたら
そんな日が 本当に来るような気がした

最終的には、9年続いた入院生活。病室に寝泊まりをしながら、献身的に看護してくれた母。口に出せない思い、が言葉となった。…

展覧会は大きな反響を呼び、喜びや希望となった。花の詩画展は国内だけでなく、海外でも開かれた。

療養を続ける私が絵を描くのは、主に群馬県桐生市の周囲を山々に囲まれた自宅。一日に描けるのは2時間程で、1枚の絵が完成するのに平均1～2週間、長いと20日程かかる。…詩を書くときには、言葉が自然に出てくるのを待つ。「人に良く思われたいと欲が出ないように、挨拶みたいに出てくる言葉がいい。」
「我が身を切り刻んででも、生きる力を富弘の中に送り込みたい」と語った母。97才で永眠した。その母へのあふれる感謝の思いも、すべて花に託してきた。…

～ 【2020(令和2)年、日本経済新聞インタビューの記事より】 ～

「鈴の鳴る道」の最後に、このタイトル名に係る出来事が載っていました。(要約)

車椅子に乗るようになって十二年。この間から、でこぼこ道を通る時、一つの楽しみができた。ある時、道路を走っていると、例のごとく、小さなでこぼこがあり、私は慎重に通り抜けようとしたその時、車椅子に付けた鈴が「チリン」と鳴ったのである。心にしみるような澄んだ音色だった。「いい音だなあ～!!」その日から、でこぼこ道を通るのが楽しみとなった。小さな鈴が「チリーン」と鳴る、たったそれだけのことが、私を、とても和やかにしてくれるようになった。…

人も皆、この鈴のようなものを、心の中に授かっているのではないだろうか。

その鈴は、人生のでこぼこ道にさしかかった時、揺れて鳴る鈴である。その鈴が澄んだ音色で歌い、キラキラと輝くような毎日が送れたらと思う。私の行く先にある道のでこぼこを、なるべく迂回せずに進もうと思う。…

「人が人として生きること」「誰もの人権が大切にされる(尊重される)こと」…その根っこにある、星野富弘さんの表された、生きる力の奥深さにあふれた草花の絵や思わず素直になれる詩などが伝えてくれる、誰もがみんな、かけがえのない生命(いのち)を精いっぱい生きていて、生命(いのち)はつながっている、ということ、私たち一人一人が、自分ごととして捉え直すことが大切なのではないでしょうか。

同和問題をはじめ様々な人権問題の解決に向け、誰もがかけがえのない生命(いのち)を精いっぱい生きて、生命がつながっていく、という真実から考えた時、他人(ひと)の人権を侵害したり、予断と偏見で差別するといったことの不合理さやおかしさ、決して…あってはならないことに、気付くことができるのではないのでしょうか。

「散っていく花の横に ひらきかけたつぼみがあり、枯れた一つの花のあとには、いくつもの実が、のこされます。人間が生きているということは、なんと、ひと枝の花に似ているのでしょう。」 ➡ 『かぎりなくやさしい花々』のあとがきより…

